

対象変化構文の格と動詞について

神 永 正 史

キーワード：テアリ文、対象変化の結果、格表示、空間的存在文、場所項

要旨

中古中期の仮名散文における「～てあり」の例文には、変化の結果状態を表すものとして、「(変化) 主体+自動詞+てあり」と、「(動作) 対象+他動詞+てあり」の形態を成す二つの構文がみられる。このうち、「対象+他動詞+てあり」の構文は、中古では対象は無格であったが、中世中頃に「ヲ」格で表示されるようになり、さらに、近世初期には「ヲ」格ばかりでなく「ガ」格でも表示されるようになったが、近世半ばには「ガ」格の表示が多く用いられるようになった。この「ヲ」格から「ガ」格への変化をもたらした要因について考察を試みた。その結果、「ガ」格の表示には、中世中頃から近世にかけてみられる「～ガ(・・ニ)アル」という存在動詞構文の出現が関係している事を明らかにした。また、この考察を通して、対象変化の結果用法に用いられる動詞の意味特徴を、場所項との関係から明らかにした。最後に近世における対象変化の結果用法の再生についても述べた。

1. はじめに

1.1 本稿の目的

中古中期の仮名散文において、文・節内の動詞連用形に「～てあり」（以下では「てあり」の全ての形をテアリで代表する）が下接している構文がみられる（以下では、このような構文をテアリ文と呼ぶことにする。また、以下で述べるタリ文も同様である）。このテアリ文には、次例のように、意味としては、主語にあたる変化主体の変化の結果状態を示し、形態としては「主体+自動詞+テアリ」の構造を成す用法がみられる。

(1) 東宮国しりたまひて、年ごろ世の中平らかに、国榮えてあり。

(うつほ 春日詣 ①257頁)

テアリ文には、変化の結果を表すものとして、他に、意味としては、動作・行為の対象の変化の結果を表し、形態としては「対象+他動詞+テアリ」の構造を成す用法がみられる。

(2) 賜はりて、急ぎ出でて見れば、おとどの御もとにある御文、いとよく封じてあり。

(うつほ 国譲下 ③322頁)

(2)の意味は「・・・の手紙がしっかりと封をされて中に入っている」となり、対象「御

文」に対する動作・行為の結果を示したものである。このように対象変化の結果用法とは、動作主・行為者には言及せず、単に対象に対する動作・行為の結果のみを述べたものである。

なお、主体・対象の変化結果の用法はタリ文にもみられる。以下にタリ文の対象変化の結果の例を示す。ここでも対象は無格表示である。

(3) むすめ住まわせた方は心ことに磨きて、月入れたる真木の戸口けしきことにおし開けたり。
(源 明石 ②256頁)

中古中期の仮名散文のテアリ文・タリ文における、これら主体・対象変化の結果構文は、共に変化主体や変化対象の変化の結果状態を述べているという点で共通したものである。このことより、変化主体や変化対象のどちらにも格表示はないが、これらは共にテアリ文やタリ文の主語の位置にあるとみなせるものであろう^{注1}。

本稿は、上記の主体変化と対象変化の結果状態（以下では状態は略す）を表す用法のうち、対象変化の結果構文における、格表示の変遷、および用いられている動詞の特徴について述べるものである。神永(2016)でも述べているが、主体変化の結果構文では、近世にはいと主体が有情物の場合、アスペクト形式自体が変わって「～テイル」となってしまうが、対象が非情物である対象変化の結果用法では、アスペクト形式として、「～テアリ(ル)」が一貫して用いられている。ただし、対象の格表示は、無格から「ヲ」格、さらに「ヲ」格から「ガ」格へという変化をみせる。本稿は主に「ヲ」格から「ガ」格への格表示の変化をもたらした要因について史的観点から考察するものである。なお、扱う資料はすべて上方の京阪語のものであり、従って、本稿は京阪語の研究に属するものである。

1.2. 論の展開

最初に、中古中期のテアリ文の対象変化の結果用法について述べるが、特にこの用法で用いられる対象変化動詞ともいうべきものを、動詞の意味内容によって分類して示す。次に、中世以降の対象変化の結果用法について述べ、対象がヲ格表示のものや、ガ格表示のものや、それら変化の過程を明らかにする。その後、対象変化の結果用法の格表示についての先行研究を示し、これらの研究に対する意見を述べ、同時に、この構文の格表示の変化をもたらした要因について考察する。また、この考察を通して、対象変化の結果用法に用いられる動詞の意味的特徴について述べ、さらに、テアリ文の対象変化の結果用法の再生とも思われる現象についても述べる。論文末で本稿をまとめる。

2. 中古中期の対象変化の結果用法

2.1 対象変化動詞の分類

中古中期の資料としては、仮名散文の作品である『源氏物語』、『うつほ物語』、『落窪

物語』(以上作り物語)、『枕草子』(随筆)、『栄花物語』(歴史物語)の5作品を用いる^{注2}。これらの作品には197のテアリ文の例がみられる。なお、例文には、解釈上必要と思われる語句がある場合は、かっこ内にそれを付け加えた。

本稿で論じる対象変化の結果を示す用法であるが、これは、加えられた何らかの動作・行為によりその対象が変化し、その結果がどのような状態になっているかという、対象の変化の結果を表すものである。この用法では対象は典型的には非情物である^{注3}。ここで用いられる他動詞は鈴木(1999)で「主体動作客体変化動詞」と分類されているもので、対象に何らかの変化をもたらす意志的動作を表す他動詞である。これらの用例は17例みられる。

この用法で用いられる対象変化動詞ともいうべきものは、表す意味によって大きく三つに分けられる^{注4}。

①動詞の示す行為により、動作の対象が位置の変化を被るもの(この種の動詞を仮に「位置変化動詞」と呼ぶことにする)で、「(とりませなど)す」「封ず」「付く」「籠む」「乗す」「さ(差)す」などである。例文を示す。

(4) ただ、いとすくよかに言少なにてなほなほしきなどぞ、わざともなけれど、物にとりませなどしてもあるを、(源 宿木 ⑥438頁)

②何らかのものが生産される／出現することによる状況変化を示す動詞(この種の動詞を仮に「出現動詞」と呼ぶことにする)で、「造る」「しつらふ」「(用意)す」「よそふ」「彫り透かす」「書く」などである。例文を示す。

(5) 民部卿の御方になむ、新しき糸毛の車、造りてあめるを、(うつほ 蔵開中 ②517頁)

③動詞の示す動作・行為により、その対象が質・形状等の変化を被るもの(この種の動詞を仮に「質的・形状的变化動詞」と呼ぶことにする)で、「結びあはす」などである。例文を示す。

(6) かの須磨のころほひ、所どころより奉りたまひけるもある中に、かの(紫の上の)御手なるは、ことに結びあはせてぞありける。(源 幻 ④547頁)

2.2 変化結果の維持の用法

同じ「対象+対象変化動詞+テアリ」の構文を成すが、変化の結果用法とは異なった意味を表すものがある。テアリに使役、意志、希求等の助動詞が接続しているものである。例を示す。

(7) 家ひろく清げにて、わが親族はさらなり、うち語らひなどする人も、宮仕へ人をかたがたにすゑてこそあらせまほしけれ。(枕 284段 483頁)

これらは「(行為者が)ーを～しておく」という「変化結果の維持」を表す用法であり^{注5}、このような例は12例みられる。そのうち(7)のように、動作対象に助詞「ヲ」がついたものが他に2例あり、このことからこの変化結果の維持の用法では、助詞「ヲ」の表示がないものも含め、対象はすべて対格で示されるべき対象変化(他)動詞の目的語に

当たるものであることがわかる。対象に格表示のない2例を示す。

(8) 「答へきこへで、ただ聞けとあらば、格子など鎖してはありなむ」
(源 末摘花 ①281頁)

(9) しばし、ここに(浮舟) 隠してあらん、と思ふも、見ずはそうごうしかるべく
あはれにおぼえたまへば、
(源 東屋 ⑥99頁)

例文(7)、(9)の対象は特定の人物であり、この用例では、対象に性情による制限がないことがわかる。このように変化結果の維持用法は意味的にも、構文的にも、変化の結果用法とは異なったものである。

3. 中世以降の対象変化の結果用法

3.1 中世後期の対象変化の結果用法

中世のテアル文についての口語資料として『中華若木詩抄』(上、中、下3巻)を用いる^{注6}。『中華若木詩抄』の成立は1534年以前と推定されている^{注7}。

『中華若木詩抄』には対象変化の結果用法は6例みられる。用いられている動詞は「栽えおく」「栽える」「立てる」(位置変化動詞)「画く」「記す」「作る」(出現動詞)である。4例ほど以下に示す。

(10) 庭下花ドモ数多栽ヘヲキテアルガ、春雨に綻ビカハリテ、フサトアルゾ。
(26番 32頁)

(11) 門前ニ柳ヲ栽テアルガ、春雨ノ中ニ緑ガ伸ブルホドニ、
(26番 32頁)

(12) 富士ニハ取り分キ烟ガ立ツト云コトヲ、唐ノ書籍等ニ記シテアルゾ。
(170番 204頁)

(13) 此屏風ヲ立テテアレバ、暁ガタ夢覚メテ漸ク天明ナラントスル時、曙光ガ写リテ梅月ガ見エタルゾ。
(205番 239頁)

対象は、(10)のみが無格で他の5例はすべて「ヲ」格をとっている。(10)と(11)では、「栽えおく」「栽える」という同様の意味の動詞を用いているが、一方は無格で、他方はヲ格をとっていることから、この時期(中世後期)あたりが、変化の結果用法におけるヲ格の出現時期かと考えられる。

3.2 中世末期の対象変化の結果用法

中世末期の口語的要素が多分に盛り込まれているという『大蔵虎明本狂言集』には、対象変化の結果用法が5例みられる。そこで用いられている動詞は、「取り散らす」「打つ(「立てる」の意)」「(縄を)かける」(位置変化動詞)「か(書)く」「こしらへる」(出現動詞)である。格表示はヲが3例、ガが1例、不明(対象がない)が1例である。(14)はヲ格の、(16)はガ格の例である。

(14) (猫の) ゆくゑを申て来り候はゞ、くんこうはこうによるべしと、高札をうち
てある、
(鶏猫 下68頁)

(15) たのふだ人の仰られたが、誠にいほがこしらへて有は (鳴子 中135頁)

3.3 近世前期の対象変化の結果用法

ここでは近世前期(江戸時代前半の130年程)の対象変化の結果用法を三つの資料から見ていく。

3.3.1 西鶴の浮世草子

17世紀末に出版された井原西鶴の浮世草子13作品(1683~1692)には、対象の変化の結果用法が12例みられる。これらの例文で用いられている動詞は、「引廻す」「落とす」(2例)「流す」「仕廻う」「揃へる」「移す」(位置変化動詞)、「書付ける」「灯す」(出現動詞)、「干す」「明け掛ける」「切る」(質的・形状的变化動詞)である。また、12例のうち、対象が無格のものが3例、ヲ格のものが4例、ガ格のものが2例、その他は、モ、ノが各1例、連体修飾1例である。例文を示す。(16)は無格、(17)はヲ格、(18)はガ格の例である。

(16) 新しき薄縁敷きし奥の間に、やさしくも屏風引廻してありける。

(好色一代男 巻3 ①91頁)

(17) 惜しむべき黒髪をきりてありける。

(好色一代男 巻2 ①53頁)

(18) こんな大臣のお宿には、今時分から仕着物が仕廻うてある者ぢや

(西鶴置土産 巻1 ③502頁)

3.3.2 近松の世話浄瑠璃・歌舞伎狂言本

18世紀初頭に刊行された、近松門左衛門による世話浄瑠璃・歌舞伎狂言本25作品(1702~1722)では、対象変化の結果用法は8例みられる。用いられている動詞は「下げる」「出す」(位置変化動詞)、「書く」(2例)(出現動詞)、「干す」「締める」(2例)「殺す」(質的・形状的变化動詞)である。8例中4例は対象がガ格をとり、無格は2例、モが付くもの1例、対象が示されていないものが1例である。例文を示す。(19)はガ格の、(20)は無格の例である。

(19) これこれ、たと晒布が干してある。この端をきつと結びつけ・

(薩摩歌 ①293頁)

(20) 波風立たずついで埒のあくように、権三様と内証の後先しやんと締めてある。

(鑓の権三重帷子 ②604頁)

3.3.3 『狂言記拾遺』

近世前期に大衆の読物として刊行された版本『狂言記』4種のうち、最後に出版された『狂言記拾遺』(1730)においては、対象変化の結果用法が6例みられる。これら6例の動詞は、「立てる」「並べる」「掛ける」「入れる」(位置変化動詞)、「とぼす」「書く」(出現動詞)である。そのうち対象がガ格をとるものは5例みられる(他の1例は対象が明記されていない)。ガ格をとる例文を示す。

(21) これに戸が立てる、此戸を明れば座敷ぢや、

(盗人連歌 巻一 475頁)

3.4 近世後期の対象変化の結果用法

近世後期の口語資料としては『鳩翁道話』（1835）を用いる。

この作品には、対象変化の結果用法が7例みられる。これらの例文で用いられている動詞は「たてる」「うつ」「積む」「持つ」（位置変化動詞）「書く、釣る」（出現動詞）「し（閉）める」（質的・形状的变化動詞）である。そのうち対象がガ格をとるものが5例、ハとトが各1例である。ガ格をとる例文を示す。

(22) 門口には何某と表札がうってある。 (続鳩翁道話 134頁)

3.5 3.1～3.4の資料のまとめ

ここでは3.1～3.4で述べた6資料における中世以降の対象変化の結果用法における格表示について、表1としてまとめてみる。

表1 中世後期以降近世後期までの対象変化の結果用法における格表示

資料	格	対象変化例(a)	対象無格	対象ヲ格	対象ガ格(b)	b/a(%)
中華若木詩抄		6	1	5		0
虎明本狂言集		5		3	1	20
西鶴作品		12	3	4	2	16
近松作品		8	2		4	40
狂言記拾遺		6			5	83
鳩翁道話		7			5	71

対象変化例は対象変化の結果用法の例数を示し、対象無格は対象に格表示のないものの数を、対象ヲ格は対象がヲ格をとる数を、対象ガ格は対象がガ格をとる数を示している。また、右側最終欄は対象変化の結果用例中で対象がガ格をとる割合(%)を表している。この表より対象変化の結果用法における格表示は、時の推移とともに、無格表示やヲ格表示が次第に減少していき、逆にガ格表示が確実に増加していったことが明らかである。

次に、6資料の例文中で用いられた動詞ののべ数を種類毎に合計してみると、位置変化動詞が23で最も多く、出現動詞が13でこれに続き、質的・形状的变化動詞が8で、最も少ない。また、6資料の例文中で対象がガ格をとる動詞は、位置変化動詞が11で最も多く、出現動詞が4でこれに続き、質的・形状的变化動詞が2で最も少ない。

3.6 主体変化の結果用法における「ガ」格の出現

中古に生じた主格「ガ」と対格「ヲ」の出現およびその普及の時期については、5.2で詳しく述べるが、ここでは主体変化の結果用法をみていく。この用法の変化主体が「ガ」格で示されているテアル文の例は、中世後期以降の各資料にみられる。3例ほど示す。

(23) 其ノ杜鵑ノ啼ツル枝ニ八月ガ冴エチギリテアルゾ。

(中華若木詩抄 66番 81頁)

(24) しゃくやくの花が、人のうらにみ事にさひてあるをみて、

(大蔵虎明本 どひつ 下 88頁)

(25) 袖から背中が、ハア、たんと腫れてあるわいの (近松 心中万年草 ② 214頁)

本来無格であったテアル文にみられるこれらの「ガ」格表示は、主体変化の結果用法の動詞が自動詞であることによって生じたものと思える。同じように考えるなら、中世後期以降の対象変化の結果用法にみられる、無格に代わる「ヲ」格表示も、そのテアル文の動詞が他動詞であることによって生じたものとするのが自然であろう。まとめていえば、中世後期以降みられる、テアル文の、主体・対象の変化結果構文中の「ガ」格と「ヲ」格の表示は、各々の構文の動詞の性格に負うもので、この構文の末尾にあるテアルとは無関係に生じた現象といえる。これに反し、中世末期以降にみられる対象変化の結果用法の「ヲ」格から「ガ」格への変換は、この用法の構文の末尾にあるテアルの影響のものであるが、これについては5章以降で述べていく。

4. 先行研究について

テアル文の対象変化の結果用法における対象の格表示についての先行研究では、管見によれば此島(1973)と柳田(1991)の2説があげられる。両氏の説を紹介し、また、これらに対する論者の意見も加える。

4.1 此島(1973)の説

此島(1973, pp.255-256)では、対象変化の結果用法における対象のとり格が、室町期の「ヲ」から江戸期の「ガ」に変わったことについて、

現代東京語では、他動詞には「ている・てある」が共に附くのであって、たとえば「かれは本を書いている」と言って継続(今書いている最中)ないし存在(今までに書いている)の意を表し、「紙に文字が書いてある」といって存在(人が文字を書いてその結果がある)の意を表す。後者の「書いてある」では、「書く」の目的語である「文字」が主語になるのが普通であるが、古くはかならずしもそうでなかったことは、前に引いた室町期の抄物等の例でもわかる^{注8}。—中略—要するに、古い「てあり」は自動詞にも他動詞にも自由に附いてその用法が広がったのが、江戸時代になって特に江戸語でしだいに他動詞のほうにかたよって来ると共に、「て」と「ある」との間のきれめが大きくなり、前の例で言えば「文字を書いてソレがある」という意味あいが強まり、その結果「文字」を主語とするのが普通になったのではないか。

と述べている。彼の説に対して柳田(1991, pp.223-224)は、

此島博士は「テ」と「アル」との間のきれめが大きくなったことをその原因と考

えておられるようであるが、そうであるならば、なぜきれめが大きくなったのかが説明されてなくてはならない。

と述べている。この説明は此島（1973）には見当たらず、論者も柳田（1991）と同様にこの説には同意しかねる。

4.2 柳田（1991）の説

柳田（1991、pp.223-224）では、対象変化の結果用法における対象のとり格が、室町期の「ヲ」から江戸期の「ガ」に変わったことについて、

筆者は、「非情物ガ+他動詞テアル」の文が室町末期から江戸時代にかけて成立したものであったとするならば、それは、次下のような事情によって成立したものではないかと考える。室町時代までは、有情物の主格に対して「テアル」が用いられていたから、例えば次のように言っていた。

(a) (某が) 花を植えてある。

ところが、江戸時代に入って、先の図5の①の段階（神永注、主格が有情物である場合に、「テイル」を用いて、「テアル」を用いなくなる段階）になると、有情物の主格に対して「テアル」を用いることができなくなった。そうすると、この表現は、次の二つのいずれかの表現をとるようになった。

(b) (某が) 花を植えている。

(c) 花が植えてある。

前者は有情物の主格に対して「テイル」を呼応させたものであり、後者は、逆に、「テアル」に対して「花を」を主格「花が」にかえることによって呼応させたものである。こうして、「非情物ガ+他動詞テアル」という表現が生まれたのではないか。

と説いている（(a)～(c)の記号および（ ）内の注は論者が加えたもの）。

柳田（1991）は、(a)のヲ格の文から、存在動詞「ある」「いる」の性情による主語の選択制限によって、(c)のガ格の文が生じたとしている。彼の説は近世以降のテイル・テアル文の使用状況から推したものであろうが、(a)から(c)に至る実際の資料は示されていない。本稿は、以下において、中古以来の対象変化の結果構文の流れを踏まえて、あくまでも当時の資料に手掛かりをもとめて、この構文におけるヲ格のガ格への移行を解明しようとするものである。

4.3 論者の意見

3.2で用いた『大藏虎明本狂言集』には、次のような対象変化の結果を表すテアル文がある。

(26) こにうとくなる人がござるが、色々の道具をあまたもたれて、ざしきにもどこにも取ちらして有と申程に、(盗人の子 下32頁)

(26)の後半の省略された部分を補うと、

(27) ・ ・ ・あまたもたれて、((うとくなる人が) 色々な道具を) ざしきにもどこにも取ちらして有と申程に、

のような文になると思うが、このような有情物を主語としたテアル文は、中世末期ではテアルの古風な用法である完成(～シタ)の意味に捉えられる恐れがあったので^{註9}、(26)のような主語や対象を省略した形にせざるを得なかったのだろう。

『大蔵虎明本狂言集』の書写(1642年)後の口語を反映しているとみられる『大蔵虎寛本能狂言』にはこの曲があるが^{註10}、そこでは、

(28) イヤ、又有徳人の普請は違ふた物じや。角から角迄も手のこうだ能い普請じや。さればこそ是にはや色々道具が取散いて有る。(こぬすびと 下178頁)

のように、対象+ガの形でなおされている。近世の京阪語ではテアル文は非情物を主語に取るので、(26)は(28)のような対象(道具)を主語とする形にせざるを得なかったものと思われる。このように対象変化の結果構文の対象+ヲの形は、その使用上様々な制限があったので、次第に用いられなくなり、代わって、対象+ガの形が広く用いられるようになったものと考えられる。それでは(28)のような「対象ガ+対象変化動詞+テアル」という構文が、どのようにして生じてきたのかを以下で述べる。

5 中世末期以降の対象変化の結果構文におけるガ格の出現

すでに3節でみてきたように、中世末期には、対象変化の結果構文の対象が、無格やヲ格表示ばかりでなくガ格で表示されるものが現れるが、この傾向は時の推移と共に深まり、近世前期末には対象の格表示にガ格が多く用いられるようになる。この対象変化の結果構文のガ格がどのようにして出現したのか、その要因を考察してみる。

5.1 空間的存在文との関係

対象がガ格をとる対象変化の結果用法は「対象ガ+対象変化動詞+テアル」の形を成すが、この構文と関係があると思われるものに、存在動詞「ある」を用いた存在文がある。特に金水(2006)が述べている物理的な空間と存在対象(主語の指示対象)との結びつきを表現する「空間的存在文」との関係が注目される^{註11}。金水(2006)によれば、空間的存在文は場所と対象を項として取る二項述語なので、「存在対象(主語)ガ「場所ニ」アル」という構文を成すが、この中で特に「・ ・ ガアル」という形が、対象変化の結果用法の「対象ガ+対象変化動詞+テアル」と関係があると思われる。以下では「存在対象(主語)ガアル」という形の出現、および使用状況などを時代別にみていく。

5.2 「・ ・ ガアル」構文の広がり

存在動詞「アリ」は、中古の文献では以下の例でも明らかなように、存在対象(主語)が、無格表示であった。

(29) 龍の頸に五色に光る玉あり。それを取りて賜へ (竹取物語 24頁)

主格助詞「ガ」については、柳田（2016、pp.190-191）に、「主格助詞「ガ」は他の格助詞に遅れて成立した。「ガ」の成立よりは早かったけれども、「ヲ」も成立がおくれた」と述べており、「ガ」が「ヲ」に遅れて成立したことを明らかにしている。

「ガ」の主格助詞としての用法については「室町時代には、体言をもうけるに至り、主格助詞として完成したと見なし得る」（『日本文法大辞典』明治書院 1971 p.86）と述べられており、また、『古典語現代語助詞助動詞詳説』（學燈社 1969 p.325）では、「この文（「鉛筆が硬い」）の形で主格を示す「が」は、例えば室町時代の抄物を見ると、もう今の「が」と同じように感じられるものがずいぶん多くみられる」として、例文を5例ほどあげているが、そのなかに次の存在文の例も示している。

(30) 残雪ガアルソ (中華若木詩抄 中、五四ウ (=164番 198頁))
このような説明から「・・ガアル」の構文は中世後期には既に出現していたと思われる。

対象変化の結果用法に現れる対象は、典型的には、視覚的に捉えられる具体的な非情物（以下では「可視的な物」と略す）である。中世後期成立の中華若木詩抄では、この可視的な物の存在対象（＝主語）が「ガ」格を取る例文が12例ほどみられる。1例を示す。

(31) 杏花ノ村ニハ必ズ美酒ガアル者ナレバ、 (181番 215頁)
中世末期の口語的要素を残す『大蔵虎明本狂言集』には、可視的な物の存在対象（＝主語）が「ガ」格を取る例文が80例ほどみられる。1例を示す。

(32) 是にふるひたいこがある程に、たらひてうり付て、 (はりだこ 上81頁)
これらの例数と表1から、中世後期では、まだそれほど「・・ガアル」の形が盛んではなかったのが、対象がガ格をとる対象変化の結果用法は現れなかったが、中世末期頃にはこの形が多くみられるようになり、その結果、対象がガ格をとる対象変化の結果用法がわずかであるがみられるようになった、そして、近世に至って、この用法の対象は多くがガ格で示されるようになったと思われる。

5.3 空間的存在文とガ格をとる対象変化の結果構文の関係

ここでは空間的存在文「・・ガ（～ニ）アル」という形と、ガ格をとる対象変化の結果構文の成立との関係を考察するため、以下では二つの口語資料を比較してみる。

『大蔵虎明本狂言集』の「連歌盗人」「よろい」にみられる4例の空間的存在文と、その部分に相当する『狂言記拾遺』の「盗人連歌」「鎧」の例文をみていく。版本狂言記の4種（『狂言記』『狂言記 外五十番』『続狂言記』『狂言記拾遺』）中のそれぞれの曲とその基となった狂言台本との関係は、種によって異なるが、『狂言記拾遺』の「盗人連歌」「鎧」について、池田（1967、p.109）は、虎明本に近い17曲のうち、「せりふに多少の不足があってもほとんど虎明本に一致する曲」の一つとして「盗人連歌」をあげ、また、「せりふに多少異同はあるものの大体虎明本に類似する曲」の一つとして「鎧」をあげている。このことから、以下に比較する狂言記拾遺の例は、虎明本との関係の中で書かれたものとみなし得る。最初の例文を示す。

(33) なふ火がある

いや人はなひよ

たしなふだ人で、ありあけ(有明)をとぼひておかれた

(虎明本 連歌盗人 下27頁)

(34) 是は火がとぼしてある、

(狂言記拾遺 盗人連歌 475頁)

これらの例文から、虎明本の空間的存在文「なふ火がある」の「存在対象(=主語)ガアル」の形から、同じく「ある」(てある)を含むテアル文の対象(=主語)をガ格で示した「対象ガ〜テアル」という形の、対象変化の結果用法のテアル文が生みだされたものと思える。このテアル文は、対象変化動詞に虎明本中の「とぼす」(出現動詞)を用いることによって虎明本の会話内容を簡潔にまとめる効果も生んでいる。また、これら(33)、(34)の例文から、存在動詞「ある(有る)」の意味がテアルのアルに含まれていることを再確認できる。

以下に他の3例を示す。

(35) いやこれにかけ(掛)物がある

是に懐紙が有よ

(虎明本 連歌盗人 下27頁)

(36) やあ、是に懐紙が掛けてある、

(狂言記拾遺 盗人連歌 475頁)

(37) 扱々見事な道具がある、

(虎明本 連歌盗人 下27頁)

(38) 是々、見させられ、見事そふな道具が並べてある、

(狂言記拾遺 盗人連歌 475頁)

(39) 又ざつくときておどす物が有と申されたが、それがほしう御ざる

—中略—

即此なかにある、

(虎明本 よろい 上75頁)

(40) これこれ、此中にをどす物が入て有、

(狂言記拾遺 鎧 580頁)

これら三つの対の例文でも、虎明本の空間的存在文である「・・ガアル」が基になって、対象がガ格をとる対象変化の結果用法のテアル文が成立していることがわかる。なお、(36) (38) (40) で用いられている動詞はいずれも位置変化動詞である。

5.4 対象変化の結果用法の動詞

3.4でも述べたが、対象変化の結果用法で用いられる対象変化(他)動詞は、位置変化動詞(「並べる」「入れる」「移す」等)が最も多く、次に多いのが出現動詞(「書く」「作る」「こしらへる」等)で、最も少ないのが質的・形状的变化動詞(「干す」「切る」「閉める」等)である。表1で示された中世末期以降の対象がガ格をとる変化結果の用法では、その対象変化動詞の数は、上述した分類順に11、4、2となる。

位置変化動詞の構文的特徴について、Marants(1984, pp.53-54)は動詞put(置く)を例に、このような動詞は場所項(locative argument、(in the box、on the table・・・))を必要とすると述べている。このことは本論で述べている位置変化動詞にもあてはまるものと思える。即ち、位置変化動詞は変化した位置を示す場所項を必要

とするのである。それゆえこの種の動詞は場所句を必要項とする動詞といえる。存在動詞「ある」も5.1で述べたように場所項をとるものであり、この点で位置変化動詞と存在動詞「ある」は共通している。5.3で述べたように当時のテアルのアルは本動詞「ある」の意味を含んだものであり、対象変化の結果用法では、「ある」とこのような共通点を持つ位置変化動詞が優先的に用いられたものと思われる。また、出現動詞も出現する場所が必要とされるものであり、構文的に位置変化動詞に近いものであったと思われる^{注12}。

2.1で述べたように、中古の対象変化の結果用法で用いられた動詞も、ここで述べた三つの分類にあてはまるものであり、中古におけるこの用法も、ここで述べたことと同様に、テアリのアリの二項動詞としての意味特徴と、場所項を必要とする各々の動詞の意味特徴を生かして成立したものであろう^{注13}。その意味で、近世前期にみられる対象がガ格をとる対象変化の結果用法の成立は、中古のこの用法の近世における再生ともいえる現象である。

5.5 中世～近世の対象変化の結果構文の変遷

金水（2006、p.274）では、近世中期以降の上方語のテアルに言及して次のように述べている。

「ーである」に着目すると、一七世紀初頭までの用法と、一八世紀の用法とは隔たりがある。文法化の観点から言えば、一七世紀の「ーである」の方が進んでおり、一八世紀の用法はむしろ本動詞「いる」「ある」に近い。

ここで述べられている一七世紀の文法化された「ーである」とは、主として、『大蔵虎明本狂言集』などに多くみられる動作性のアスペクトの完成（～シタ）や、パーフェクトの用法のものを指していると思える。これらは一八世紀にはいると次第にテアルの用法から失われていき、主体・対象の変化結果用法のような状態性のアスペクトを示すもののみが残るが^{注14}、このうち、対象変化の結果用法では、一六世紀に入ると対象がヲ格で示されるという変則的な形をとるが、一七世紀末から一八世紀にかけて、存在対象（＝主語）がガ格をとる空間的存在文（「・・ガ（～ニ）アル」）の影響を受け、テアルのアルが存在動詞「ある」の意味を持つことにより、変化対象がガ格をとる対象変化の結果用法を再生させている。このような一七世紀から一八世紀にかけてのテアル文の対象変化の結果構文の変遷は、上述の金水（2006）の説に沿ったものであるといえよう。

6 本稿のまとめ

中古では、テアリ文の対象変化の結果用法において、対象は無格であるが、テアリ文の他の変化の結果用法や、タリ文の変化の結果用法と同様に主語の位置を占めている。中世後期になると、対象変化の結果構文の対象はヲ格で示されるようになった。しかしながら、存在主体（＝主語）をガ格で示し動詞に「ある（在る）」を用いる空間的存在

文が、中世末期～近世前期にわたり多くみられるようになると、この存在文を基にした、対象がガ格で表示される対象変化の結果用法が生じた。この対象変化の結果構文は、対象(=主語)が無格ではなくガ格を取る点で異なるが、中古の対象変化の結果用法の再生ともいえるものである。テアルの本動詞「ある」は場所句を必要項とするものなので、対象変化の結果用法で用いられる対象変化動詞には、同様に場所句を必要とするような動詞が優先的に用いられているのである。

注

- 注1 タリ文の対象変化の結果構文の主語については神永(2016、pp.57-58)を参照。なお、変化対象がテアリ文の主語である件については注13でも触れている。
- 注2 5作品の例文はすべて新編日本古典文学全集(小学館)に収録されているものを使用した。また例文の検索・収集には国文学研究資料館データベース古典コレクション『源氏物語』(1999)、『歴史物語』(2003)(CD-ROM版、岩波書店)を利用した。用例中の出典名は源氏物語が「源」のように、全て略して示した。なお、中古のテアリ文では、テとアリの間に係助詞や副詞(「しも」等)が挿入されているものが半数を超える。テアリのもつアスペクトの意味は、これら挿入語句の有無にかかわらず変わらないので、本稿ではこれら形態の異なるテアリ文もすべて同等に扱う。また、テアリ、タリは時代の進行に応じてテアル、タルと表記を変える。
- 注3 対象変化の結果用法には、対象として有情物(人々)のものが2例ある。1例を示す。
また、御迎への出車ども十二、本所の人々乗せてなんありける。(源 宿木 ⑤486頁)
これらの2例の「人々」には、自らの意思で動作するという意志性がみうけられないので、非情物として扱えるものである。
- 注4 神永(2016)では、対象変化動詞を大きく二つに分類しているが、ここでは同じ内容であるが、動詞間の異なりを明確にするため三つに分類してみた。なお、分類された個々の動詞の意味特徴については5、4で述べる。
- 注5 例文(7)の後半は「宮仕えしている人を各部屋に置いておきたいものだ」の意味になる。なお、この例文の行為者は枕草子の作者である清少納言である。
- 注6 迫野(1998、pp.222-223)によれば、「中華若木詩抄」以前の「蒙求抄」「毛氏抄」には対象変化の結果用法が現れない。
- 注7 以下で使用したテキストについては、本稿末の<調査資料>で示す。
- 注8 この例には本稿の例文(12)が含まれている。
- 注9 テアルの古風な用法である完成については、神永(2015、pp.9-13)を参照。
- 注10 虎明本と虎寛本と関係については、神永(2015、pp.3-4)を参照。
- 注11 金水(2006)では存在文を「空間的存在文」と、特定の集合における要素の有無を表す「限量的存在文」の二つに分類している。なお、金水(2006、p.283)では、空間的存在文とテアルの関係について、「存在表現の用法の中では、特に空間的存在文から存在型アスペクト形式(=テアル、テイル等(この部分論者加筆))へと発展するものと思われる」と述べているが、記述はこれだけに留まっている。本稿はこの空間的存在文とテアル文の関係について、具体的な用例を示しながら考察を加えていったものである。
- 注12 出現動詞「書く」を用いた次の例文では、場所句が含まれている。
なむよろい、なむよろい、是になにやらかひてある (虎明本 よろい 上76頁)
また、質的・形状的变化動詞で二度用いられている「干す」については、この動詞を用いた次のような文例がみられる。
垣根に干し捨てし胡麻殻を一束ね引き寄せ、 (西鶴 新可笑記 ④492頁)
ここでは「干す」は場所句「垣根に」と共に使われているので、この動詞は場所句と共に共起しやすい面をもっていたのかもしれない。
- 注13 このことから、中古の対象変化結果構文の対象は文主語に相当するものであることが明らかである。

注14 中世末から近世前期にかけてのテアル文の変遷については神永（2015、pp.8-13）を参照。

<参考・引用文献>

- 池田廣司 1967 『古狂言台本の発達に關しての書誌的研究』風間書房
神永正史 2015 「中世末のテアル文にみられる完成の用法について」『日本語の研究』第11巻2号
2016 「変化の結果を表す「～てあり」の用法について - 「～たり」との関係から-」『日本語の研究』第12巻4号
金水 敏 1993 「古典語の「ヲ」について」『日本語の格をめぐって』仁田義雄編集 くろしお出版
2006 『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
此島正年 1973 『国語助動詞の研究 体系と歴史』桜楓社
追野虔徳 1998 『文献方言史研究』清文堂
鈴木 泰 1999 『改訂版 古代日本語動詞のテンス・アスペクト -源氏物語の分析-』ひつじ書房
2009 『古代日本語時間表現の形態論的研究』ひつじ書房
柳田征司 1991 『室町時代語資料による基本語詞の研究』武蔵野書院
2016 『日本語の歴史6 主格助詞「ガ」の千年紀』武蔵野書院
山口堯二 2003 『助動詞史を探る』和泉書院
湯澤幸吉郎 1936 『徳川時代言語の研究』刀江書院（風間書房より復刊、1962）
Marants,A.P. 1984 “On the Nature of Grammatical Relation” Linguistic Inquiry Monograph 10, MIT Press, Cambridge.
Miyagawa,S. 1989 “Structure and Case Marking in Japanese” Syntax and Semantics Vol.22, Academic Press.

<調査資料>（本文中で示したものは除く。○はテキストとして使用したもの）

- 『新日本古典文学大系 中華若木詩抄 湯山聯句鈔』大塚光信他2名校注、岩波書店、1995。
『中華若木詩抄』中田祝夫編、勉誠社、1977。
『中華若木詩抄 卷之上・中・下 文節索引』深野浩史（編）、笠間書院、1983～1989。
○『大蔵虎明本 狂言集の研究 上・中・下』池田廣司、北原保雄著、表現社、1972～1983。
『大蔵虎明本狂言集総索引1～8』北原保雄・他（篇）、武蔵野書院、1982～1989。
○『大蔵虎寛本 能狂言上・中・下』笹野 堅校訂、岩波書店、1942～1945。
○『新編日本古典文学全集 井原西鶴集 1～4』暉峻康隆他1名校注、小学館、1996～2000。
『新編西鶴全集 1～5』新編西鶴全集編集委員会編、勉誠出版、2000～2007。
○『新編日本古典文学全集 近松門左衛門集 1、2』鳥越文蔵他4名校注・訳、小学館、1997～1998。
○『日本古典文学大系 歌舞伎脚本集 上』浦山政雄他校注、岩波書店、1960。
『近松門左衛門 近世文学総索引』近世文学総索引編集委員会（編）、教育社、1986。
○『新日本古典文学大系 狂言記』橋本朝生他1名校注、岩波書店、1996。
『狂言記の研究 上・下』北原保雄、大倉浩著、勉誠社、1983。
○『鳩翁道話』柴田鳩翁著、柴田実校訂、平凡社、1970。
○『新編日本古典文学全集 竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』片桐洋一他3名校注・訳、小学館、1994。

（かみなが せいし 筑波大学大学院 博士課程 人文社会科学部 元院生）